

フルベール・ユールー初代大統領 ①

ブラザヴィルの南西約50kmのところ、「フラカリの滝 (Les chutes de la Foulakri) という場所がある。いくつもの大きな岩の間から大量の水が流れてくる滝の様子は人々を引きつけ、ブラザヴィル近郊では数少ない景勝地の一つである。



フラカリの滝

自然美の豊かな場所では、日本と同様にコンゴでもさまざまな伝説が生まれる。時としてそれは史実と重なることもある。たとえばこの滝では、フランスの植民地統治に抵抗した現地人がこの地で斬首されたのだが、その頭部はその後川岸に留まり、自身のための墓穴を掘ったことによって窪地ができ、そこに水が流れ込み今のような滝になったと言われている。この滝にまつわる伝説には、植民地から独立したコンゴの初代大統領となったフルベール・ユールー (Flubert Youlou) に関係するものもある。

ユールーは、1917年6月にプール地方のマディブ (Madibou) という村で生まれた。首都ブラザヴィルから南西約30kmの地点で、一帯に多く住んでいるラリ族 (Lari) の出身である。1926年、9歳のときにカトリック教会で洗礼を受け、フルベールという洗礼名を授かる。ブラザヴィルの神学校に進んだ彼は成績が優秀だった。その後現在のカメルーンで中等教育を了え、さらに神学を学んで、1946年には神父の資格を得る。その後約10年間、司祭 (Abbé) として活動をした。

宗教家としてのキャリアを辿る一方で、彼は政治に大きな関心を抱いていた。司祭でもあったフルベールには、当時植民地抵抗のシンボリックな存在であり、解放の「メシア」(救世主) として崇められていた同じラリ族出身のアンドレ・マツワ (André Matsoua, 1899～1942) のイメージが重ねられ、マツワの再来を信じるラリ族の人たちから大きな支持を得るのだった。しかし、1956年の仏領中部アフリカの代表者を選出する選挙では、3位という結果で敗北を喫した。

カトリック教会は彼が政治活動に関与することに反対していた。それでも政治に関わるユールーに対して、スータン (聖職の平服) を着ることを禁じ、宗教儀式を行うことも禁止した。またユールーは聖職者の独身性に反対するだけでなく、自らも一夫多妻であったこともあり、教会側としては要注意人物だったのかもしれない。こうした彼に向けられた「白人たち」の姿勢に対し、マツワの再来を信じるラリ族の人たちは、彼を「黒人の救世主」として一層見るようになっていったのではないだろうか。そこへさらに滝の伝説が加わることによって、彼の神秘性はいよいよ高まっていく。その伝説によれば、彼はスータンを着たまま川で泳ぐことで先祖たちの力を得たというもので、その証拠に「川から出た彼のスータンは全く濡れていなかった」という。

1956年5月、ユールーはアフリカ人の利益を優先することを訴え、UDDIA (アフリカ人利益擁護民主連合) という政党を結成する。その政党のシンボルはワニであった。ワニは現地

では力強さを象徴するものであると同時に、滝の伝説にも関連している。それは「滝の近くにたたずむユールーの目前に一匹のワニが姿を現した」というものである。彼の政治的な影響は、出身地のプール地方だけでなく、ブエンザ (Bouenza) やクイル (Kuילו)、ニアリ (Niari) といったコンゴの南半分全域に及び、やがて彼は1956年11月の地方議会選挙でブラザヴィル、ポワント・ノワール、ドリジーといった重要都市で勝利し、自身はブラザヴィル市長に選出されるのだった。

彼にはジャック・オパンゴ (Jacques Opangault) という政敵がいた。コンゴの中央に位置するキュベット (Cuvette) の出身でボシ族 (Mbochi) である。MSA (アフリカ社会運動) という党を結成し、1946年にはすでに植民地議会の代表に選ばれていた。1957年3月の植民地議会選挙では、MSAはユールーが率いるUDDIAに勝利した。ただ、僅差だったので、同数の大臣を双方から出すこととなり、ユールーはこのとき農業大臣として入閣している。地方を回る機会が多いことがこの大臣選出の理由のようだ。

その後、派閥の分裂などによって1957年11月、UDDIAが多数派となる。1958年9月のフランス共同体への参加の可否の国民投票 (20巻1月号参照) では、99.3%の賛成で共同体への参加を決定している。

1958年11月、新しい国の制度を決める重要な議会が招集され、ユールーが首相になる。フランス共同体の参加に関する国民投票ではユールーとオパンゴは足並みをそろえたが、1959年の選挙の実施を巡って対立する。ポワント・ノワールでの抗争がブラザヴィルに飛び火し、ポトポト地区を中心としてユールーを支持するラリ族とオパンゴを支持するボシ族が武装衝突を起こし、死傷者数百名が出るまでに発展した。結局、独立後の国民議会となる選挙を同年4月に実施するが、周到な準備をしたユールー派が圧勝した。

1959年11月21日、ユールーは大統領に就任。そして翌年の1960年8月15日、コンゴはフランスから独立する。初代大統領となったユールーは、教会から禁じられていたスータンを身にまとい、自ら「Abbé」の称号を付けるのだった。

ユールーやオパンゴのように、独立前に政治を担うような層の人たちは、植民地統治下での教育で優秀な成績を修め、現地のエリートとして宗主国との関係も深い。植民地を全面的に否定するのではなく、逆にそれをうまく利用することによって、国内においての地位を確保するのである。また、フランス側も旧宗主国として、それまでのさまざまな既得権を保持し続けるため、独立後のアフリカの国々をコントロールしやすいような人を選び、後押ししたとも言えるだろう。

現在、フラカリの滝へは、悪路が続きアクセスは難しい。少なくともかつてのような観光地として人々が訪れることはないようだ。また、90年代以降に組織された反政府ゲリラがこの地域を中心に活動を展開していたので、治安の問題もある。そのゲリラのリーダーは、ユールーと同じラリ語を話し、仲間のなかで神格化されていると言われている。もしかしたら、滝にまつわる新たな伝説がすでに生み出されているのかもしれない。